

下水道と家庭用品をテーマにシンポジウム開催 <21世紀水倶楽部>

家庭用品メーカー、生活者、下水道管理の多角的視点で議論

NPO法人21世紀水倶楽部（大迫健一理事長）は下水道展'04横浜会期中の7月29日、パシフィコ横浜会議棟において、「下水道と家庭用品を考える」と題したシンポジウムを開催した。

21世紀水倶楽部は昨年9月のNPO法人化以来、下水道を含む環境事業の普及啓発活動と支援活動を積極的に展開しているが、今回のシンポジウムは普及啓発活動の一環として、横浜市下水道局、(財)下水道新技術推進機構、(社)日本下水道施設業協会の後援で行われた。参加者は地方公共団体やコンサルタント、関連機器メーカーなど約60名。

シンポジウムではまず、21世紀水倶楽部・亀田泰武理事長が、東京・多摩川の水質や総務省家計調査をもとにしたひと月当たりの石鹸洗剤・化粧品・医薬品消費料、海外旅行者1人当たりのCO₂排出量等を紹介するとともに、「下水処理を考える上で環境にやさしい方向で家庭下水が変わっていったらと願うが、環境にやさしいというのはなかなか難しい問題である」等と問題提起を行った。

これを受けて国土技術政策総合研究所・南山瑞彦下水処理研究室長が、「家庭用品と下水道」の演題で、家庭下水を対象とした国総研での調査結果を踏まえ、新しい家庭用品の普及や下水汚泥の緑農地利用により、内分泌攪乱化学物質等これまで

ほとんど家庭下水等には含まれていなかった物質が下水道に排出されていることを述べた。

引き続き家庭用品メーカーの立場からINAX研究開発センター・井須紀文創造技術研究室長が「住宅水回り機器の環境技術」と題する講演を行ったが、この講演では、浴槽入浴よりも身体の芯まで温くなるシャワー・ド・バスや発電機能がついた自動水栓等、INAXの水回り商品の、興味深い開発の取り組みなどが講演された。

次に生活者の立場として、横浜市消費者団体連絡会・服部孝子事務局長が「生活者からみた下水道」のテーマで講演を行った。服部氏は、固形石鹸での洗髪・台所洗剤の不使用・ガラ紡織の「びわこふきん」の使用等の活動を始めてから38年目になるという自らの体験を通した取り組みを述べるとともに、「環境汚染はちょっとやそっとの取り組みでは防げないが、塵も積もれば山となるである」と生活者の環境保全に対する意義を語った。

続いて横浜市下水道局・北谷道則水質管理課長補佐が「下水道管理の視点」で、界面活性剤や環境ホルモン物質、PRTR法指定物質を中心とした、下水処理場での浄化能力について講演、それらの物質の大部分が下水処理で対応できていること等を報告した。

4者の立場からの講演終了後には、家庭下水の将来等についてパネルディスカッションが行われ、その中では「家庭下水の水量は今後増えるか」というテーマも議論されたが、個人的な見通しも含めて、1人当たりの家庭下水量は増えるという見通しが大半を占めたものの、横浜市では処理水量の減少という実態が報告され、実態と見通しの乖離もあるよう。しかしながら家庭下水は、今後の下水道事業を左右する大きなテーマであり、果敢にそのテーマに挑戦した今回のシンポジウムの意義は大きい。



パネルディスカッションのもよう